IS　6311115 松川　和生

テーマ：態度論と評価論

人を評価することは難しいことである。教員が生徒を評価するとき、講義のようなペーパーテストはまだしも、実技授業の評価は特に難しい。実技の授業では個人の試合結果のみで評価はできない。過去の運動経験の有無によって運動能力や技術に個人差のばらつきがあるからである。よって、実技の授業においては実技の授業の“態度（能力）”をいかに評価するかが重要である。

実技の授業では、喜怒哀楽の感情が絶えず表出される。そこには、運動技能に関係なく、生徒一人ひとりの性格の一面を観ることが可能である。実技授業における、やる気のない態度や乱暴な行為、言葉のやり取りは、人間の心性が有する自然現象である。そこでは、身体活動を通して、各々が自らの身体と対話を始めており、また他者の情動に即応して自らの情動が変化することを知るのである。

スポーツの場面において、何よりも重要なことはその“場の体験”である。たとえ“悪い態度”があったとしても、どのように注意するかということで信頼関係が芽生えることもあるのである。また、“悪い態度”を放置していては、皆が一緒に楽しむことができないことは誰もが知っている。したがって、険悪なムードを作り出すことがあるとしても、仲間が仲間に注意し合うことが大切であり、その勇気ある行為こそが両社の“態度（能力）”を向上させるのである。